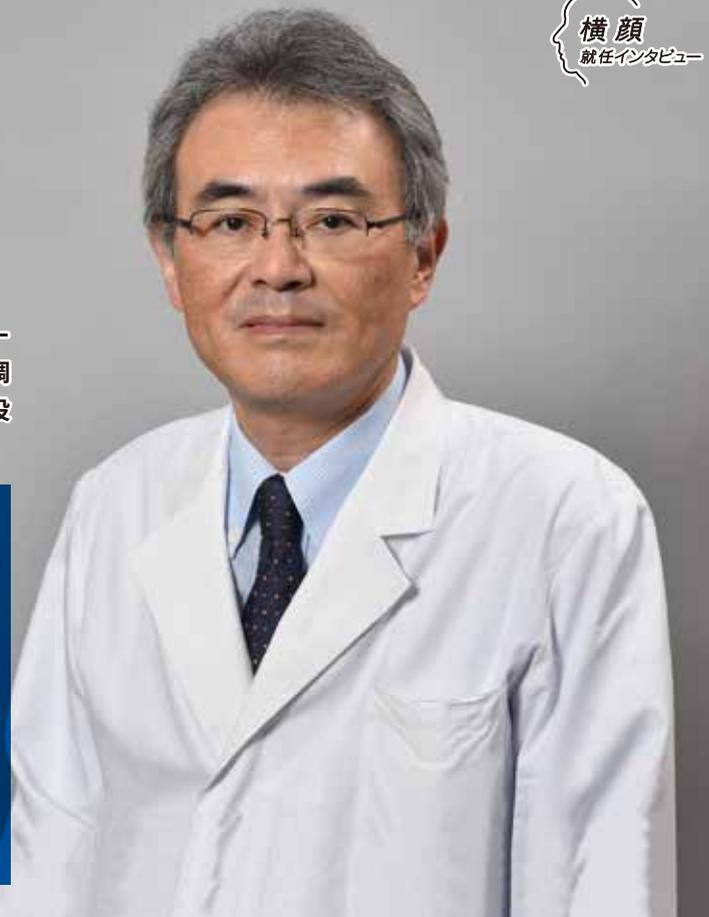


横顔
就任インタビュー



依存症診療をけん引 持続可能な体制を

依存症診療で実績を上げてきた久里浜医療センターは、依存症対策の全国の拠点機関として人材育成や調査研究事業も担う。松下幸生院長は、多岐にわたる役割を全うするため経営基盤の足固めに着手する。

独立行政法人国立病院機構
久里浜医療センター

まつした さちお
松下 幸生 院長

1987年慶應義塾大学医学部卒業。米国立アルコール乱用・依存症研究所(NIAAA)、独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター副院長などを経て、2022年から現職。

独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター
神奈川県横須賀市野比5-3-1 ☎046-848-1550(代表)
<https://kurihama.hosp.go.jp/>

方向性を定め 経営立て直しへ

「当センターが国内の依存症診療をリードするという役割を担いながらも、持続可能な医療提供体制を築くため、調整役に徹すること」が院長になった私の仕事だと考えています。医師人生の大半を久里浜医療セン

ターと共に歩んできた松下院長は、こう語る。

1963年に日本で初めてアルコール依存症の専門病棟を開設し、それ以来、国内のアルコール依存症診療をリードしてきた同センター。前院長で、現在は名誉院長を務める樋口進氏が中心となってギャンブル、ネット・ゲームと診療対象

を広げたことで、同センターの役割は拡大してきた。

「私たちに求められる役割が大幅に増している中で、働き方改革への対応も迫られています。さらに収支をどう改善していくか。これが喫緊の課題です」。難題を解決に導くため、方針を定めて有効なプランから取り組んでいく。

デイケア拡充し 高齢者医療を強化

以前と比べてアルコール依存症を扱う施設が国内に増えたことに伴い、同センターのアルコール依存症患者数は緩やかな減少傾向にあるという。「今後、収支改善の柱となるのは一般の精神科医療で、特に認知症を中心とした高齢者への医療だと考えています。神奈川県が指定する「認知症疾患医療センター」の一つで、院長就任後に医師会や開業医にあいさつ回りをした際にも、認知症対応へ寄せられる期待の大きさをひしひしと感じたという。

そこで計画しているのが、認知症看護の認定看護師の充実や、軽度認知障害の人を対象としたデイケアの拡充だ。「週に数回デイケアに参加してもらい、体を動かす頭を使うことで認知症への移行を予防できれば、地域にもメリットは大きいでしょう」

収支面では、「医療観察法病棟」(52床)の機能強化もポイントだと考えている。治療抵抗性統合失調症薬であるクロザピンについて、副作用が起こる可能性に留意して慎重に扱いつつ、もう一歩活用を進めることで一人でも多く、また早期に患者を地域へ帰すことを実現したいと語る。

入院患者を確保し病床の稼働率を高めるため、地域

連携と共にベッドコントロールも促進していく。これまで病棟は依存症の種類別や性別などで細かく分かれていたが、2021年に混合型の新病棟を開設した。「入院が必要な方を断らずに受け入れられるように、診療科の区分やこれまでの慣習にとらわれず、ケースごとに融通し合いたい。そのためには、職員の意識改革が肝になると感じています」

横のつながり育み 病院全体の活性化を

職員のモチベーションの向上につながる試みとして、院内での定期的な交流研究会の開催を計画している。「診療は依存症だけでも複数の分野にわたり、医療観察法病棟や臨床研究・教育部門もあります。それぞれの職員が専門に特化している反面、他部門が何をやっているのか意外に知らない部分は多い。互いの活動を発信し合う場を設けることで、職員の励みになればと考えています」

知見を共有しアップデートすることは、診療レベルを底上げし、将来的には病院のブランド力強化にもつながると期待する。「人材の育成や調査研究、海外の機関との交流など、当センターには独自の役割がある。これらを維持するための地盤を築いていくことに力を注いでいきます」